



『教育の転換期だからこそやり甲斐』

福岡県教育局 振興部
義務教育課長 塚 田 淳

福岡県小学校長会の皆様におかれましては、平素より本県の教育行政に御理解、御協力をいただき、誠にありがとうございます。本年度も昨年度に引き続き、学校での感染防止と学びの保障との両立に最善を尽くしていただきおり、深く感謝を申し上げます。

はじめに、嬉しい出来事を二つ御紹介します。

まず、二年ぶりに実施された全国学力・学習状況調査で、本県小学生の成績が四回連続で全国平均を超えて、小学校で学んできた中学生の成績も全国平均を超えて、過去最高となりました。

かつて本県の成績は全国平均に届かず、学力向上が長年の課題でしたが、検証改善サイクルの確立、主体的・対話的で深い学びのための授業改善、鍛ほめ福岡メソッドの浸透等の各学校の組織的取組が着実な成果として現れています。

そして、感染症対策による制約がある中でも、様々な工夫を講じながら粘り強く学習指導に当たられた各学校の努力の証であるとも思います。

次に、本県で実施している教育の情報化の推進状況調査において、「管理職のリーダーシップと学校情報化ビジョン」、「情報化推進組織・校務分掌」等の項目に大きな進捗が見られました。

ICT環境の整備については、国費補助により足並みが揃うと考えていましたが、その後のICT活用については、開始時期や進捗状況の

格差が大きくなるのではと懸念しておりました。「GIGA元年」ということで、各学校では機器導入や授業準備に大変な御負担があることと思いますが、懸念の試行錯誤により、デジタル教科書による分かりやすい授業、学習支援ソフトによる知識の定着、オンライン学習による学びの保障等、様々な活用が実現しつつあります。もちろん、進捗状況には差異がありますし、活用の質も高めていく必要がありますが、今後のICT活用推進の基盤となる、各学校の計画策定や体制構築が着実に進捗していたことは、大変心強いことだと思っています。

これら二つの出来事を通して、困難な課題や急激な変化に直面しても、校長のリーダーシップの下で組織的に取り組めば、必ずや課題解決や前向きな一步を実現できると感じました。

昨年度の会報においては、「これまでの仕組や手法を『当たり前』とせず、(中略)『新しい教育』を創造していく」という姿勢と覚悟をもつ必要がある」との思いを述べさせていただきました。これは自分自身への戒めでもあり、現在、学力向上やICT活用推進の他、働き方改革の推進や不登校対策の充実等の義務教育の諸課題について、転換点となるような施策を実現できないかと日々取り組んでいます。

過去の経緯や意見の相違もあり、一筋縄ではいかない難題ばかりですが、有識者に教えを請うたり関係者と相談したりして一步ずつ進めていく過程には、大いにやり甲斐を感じています。教育の転換期と言われる昨今、各学校においても様々な課題や変化に直面されていることだと思います。そのような難局に立ち向かってこそ感じられるやり甲斐もあると思いますので、日々をともにがんばりましょう。

発行人

福岡県小学校長会
会長 渡邊正則

事務局

〒812-0053 福岡市東区箱崎2丁目52番1号
福岡リーセントホテル1階
TEL (092) 292-2292 FAX (092) 292-2294

特色ある学校経営

チーム力を向上させる学年単位での目標管理と人材育成

糸島市立東風小学校長 重富泰敏

本校は全校児童六百二十名の学校で、市内十六校中四番目に児童数が多い学校です。教職員の世代構成では、教員の四分の一が二十代です。一方で、他校を経験したことのある三十代の割合は少なく、四十代の層の割合が市内で一番目に高いという特徴があります。今のところバランスの取れた構成を維持できていますが、今後一気に若年化が加速する可能性があります。

また、学力調査では、平均点が市の平均を超えているものの、複数の学年において、学級間差が見られる傾向があり、特に若年教員の学級で学力を高められていません。そこで、これらの課題を克服するために二年前から、前校長の石硯昭雄校長指示のもと、学年での目標管理の徹底と人材育成を重点として取り組んでいます。

一 「コンシリエリ」の役割の位置付け

各学年に学年主任（メンター）・若年教員（メンティ）に加え、「コンシリエリ」を新たに設置することで、学力向上を組織的に進める人材育成と目標管理を実行しています。※「コンシリエリ」とは、イタリア語で「相談役・アドバイザー」を意味しています。学年体制においての主な役割として、学力向上への重点達成に向けたメンターの相談役となり、校務分掌の

主任として位置付いています。新しい教育課題では、英語、ICT、SDGs等への対応があります。

二 世代別研修会の実施

①学年の学力向上プランに基づく目標管理

学年経営（学力向上）プランを作成し、「学習指導力」「学級経営・生徒指導力」等の項目について、毎月各世代（メンター・メンティ・コンシリエリ）が自己評価を実施し、月末の世代別研修会で各学年の取組状況を報告し合い、P-DCAサイクルの充実を図ります。各世代の指導は、校長・教頭・主幹教諭が分担して行います。

②ロードマップに基づく若年教員育成

「若年教員育成ロードマップ」「若年教員育成



【毎月1回の世代別研修会の様子】

うきは市立江南小学校長 井上哲治

本校は、全校児童百五十名で、各学年一学級、特別支援学級二学級、計八学級の学校です。本校は、江戸時代に大石・長野水道をつくるという偉業を成した五人の庄屋の郷でもあります。校訓は「至誠一貫」、人としてまごころを貫き通す子どもを目指しています。

人としてまごころを貫き通す子どもの育成

本校は、全校児童百五十名で、各学年一学級、特別支援学級二学級、計八学級の学校です。本校は、江戸時代に大石・長野水道をつくるという偉業を成した五人の庄屋の郷でもあります。校訓は「至誠一貫」、人としてまごころを貫き通す子どもを目指しています。

評価表」を各学年で作成しています。若年教員（メンティ）の状況についてメンター・コンシリエリが（数値）評価を行い、世代別研で若年層の成長を出し合い、課題を明らかにし、スマートステップで改善のための方策を検討します。

【成果】と【課題】

○若年教員の自発性の高まりと、学校外での実践発表等へ挑戦する教員の増加

○子どもの発言力等における学級間差の縮小

○新任学年主任やコンシリエリ制度に対する職員の高評価

●若年教員の意欲や指導力の高まりと子どもの学力向上との相関への分析

●今後の人事異動への対応・仕組みを変え柔軟に

本校では、ライフステージに応じた成長課題をもたせることで、皆が成長することを目標とされています。自己成長だけでなく他者の成長に貢献する態度を育成することを通して、学び合う風土の醸成を大切にしています。

一 花いっぱい運動

本校は、花いっぱい運動を約三十年前から続けています。この運動は、学校と地域が共にまごころを育てようという志のもと、フラワーバンク（老人会や地域の方、または、保護者などが登録）と連携をとつて行っています。子どもが登録）と連携をとつて行っています。子どもたちが、日常的に花に関わり、学校を花いっぱいにしていくことで、まごころを育てていこうとするものです。

本年度は、コロナ禍なので人数を制限して来て頂き、六月に定植をしました。写真に見られるように六年生が一年生に水やりの仕方を優しく教える姿が見られました。また、二学期も春に咲く花の定植を行い、子どもたちは、花と関わり続けていきます。

二 児童会・生徒会合同会議（児童会の取組）

うきは市では、各学期末に児童会・生徒会合同会議が行われています。その場では、各小学校の児童会（生徒会）が取り組んだことを交



【花のお世話】

本校では、本年度のスローガンとして「ふわふわ言葉がいっぱいで、みんなと力を合わせる江南小にしよう」を掲げ、取り組んでいます。具体的には子どもたちが、言われて嬉しかったふわふわ言葉をカードに記入し、回収ボストに入れ、それを給食の時間に児童会が放送します。放送された子は、とても嬉しそうな顔をしています。このように各学校で取り組んだことを冒頭に述べた会議において交流し、改善を繰り返しながら取組を続けてきました。

これら二つの取組の成果の一つとして、子どもたちの心の成長をあげることができると思います。学校前の横断歩道で停車してくれた運転手に向かって、子どもたちがおじぎをする姿がよく見られるようになりました。私は、花のお世話活動や「ふわふわ言葉」の取組を通して、相手の視点に立つ大切さを実感して、まごころが育つてきていると感じます。

このよさを更に高めていくことができるよう、地域の方・保護者・教職員の「チーム江南」の結束を強くし、子どもの健全な育成のため組織的に頑張っていきたいと考えます。

地域と共にある学校

筑後市立下妻小学校長　徳　永　　裕

本校は、筑後市南部の農村地帯に位置し、児童数六十五名の小規模校です。令和七年度に学校再編により百三十五年の歴史に幕を閉じることになっています。閉校に向け、下妻小学校

がなくなるのではなく、下妻小学校が新しく生まれ変わるという意識を持つことができるよう、地域とのつながりを重視した教育活動を推進しています。

コミュニティ・スクールの共育目標を「しまつまを愛し、人と人のつながりに感謝し、自分から行動していく子どもの育成」とし、地域学校協働事業と連携・協働により、「光り活動」をして取り組んでいます。この「光り」という言葉は、校歌の歌詞にある言葉です。校歌の作詞者は、詩人与田準一さんで実際に大正から昭和にかけて本校に勤務されていました。

「光り活動」の一つとして行っている「もち米プロジェクト」を紹介します。

年間を通しての「もち米づくり体験活動」です。五月には種もみの浸種から種まき。育苗、そして田植え。田植えをするときには、代掻きにあたる「ドロリンピック」を行います。このドロリンピックは、今年で二十九回目を迎えた。田植え後、稻の生育調査を経て、秋に収穫を行います。更に収穫後、刈り取った藁を用いて十二月にしめ縄づくりを行います。もち米は、餅つきをして地域の独居老人の方やお世話になつている方々に子ども達が届けます。これらの一連の活動を地域やPTAの協力を得ながら全校児童で取り組んでいます。

特に今年度は、五年生が「合鴨農法」を取り入れました。社会科の学習で食料生産について学んでいく過程で「合鴨農法」に目が留まり、自分達も挑戦したいと意欲を持ち、最後までやり通すという覚悟を持って取り組みました。取り組む過程で「合鴨が襲われないようにするに

がレールを創っていく」という子どもが進める授業づくりを推進しています。そして、大人から与えられるばかりではなく、新しいものを創造・発信したり、また下妻のよさを再発見したりして、地域への愛着を深めたいと思います。

が学びの道筋を創り出していく教育活動を大切にし、地域の方々は身近な存在となっています。

本校は、子どもの主体性を引き出し、子どもが学びの道筋を創り出していく教育活動を大切にしています。それが、子どもたちの成長と地域社会の発展に貢献する大きな力となることを確信しています。



【代掻きにあたる「ドロリンピック」（種目:どろんこフラッグ）】

にし、「教師がレールを敷く」から「子どもがレールを創っていく」という子どもが進める授業づくりを推進しています。そして、大人から与えられるばかりではなく、新しいものを創造・発信したり、また下妻のよさを再発見したりして、地域への愛着を深めたいと思います。

にし、「教師がレールを敷く」から「子どもがレールを創っていく」という子どもが進める授業づくりを推進しています。そして、大人から与えられるばかりではなく、新しいものを創造・発信したり、また下妻のよさを再発見したりして、地域への愛着を深めたいと思います。

小規模校の良さを生かした取組

添田町立落合小学校長 久富 靖剛

本校は、靈峰「英彦山」の麓に位置する農山村地域にあり、英彦山地区を含む広域的な校区を有しています。敷地内には、彦山川に注ぐ小川が流れおり大自然に囲まれた、準へき地・小規模校であり、全校六クラス（複式一、特学二）で、全校児童は二十五名です。

多くの学校がそうであるように、本校でも昨年度から新型コロナウイルス感染拡大防止のため、様々な制約を受け、多くの学校行事や取組が中止や縮小を余儀なくされました。

例年本校では、学校教育目標である「ふるさとを愛し、豊かな心を育み、自ら学びたくましく生きる子どもの育成」を実現するため、「恵まれた、豊かな自然環境を生かした体験活動」「地域住民と連携・協力した地域交流活動」の二点に重点を置き、教育活動を展開しています。それを着て競技します。見守り活動も充実しており、子どもにとつても教職員にとつても地域の方々は身近な存在となっています。

一 本校における学力向上の取組

本校では、少人数である事を「利点」として捉え、そして最大限に生かすようにしていま



【しめ縄作りの様子】

す。具体的には、児童一人一人の学習状況やニーズに応じ、指導目標や指導内容、そして指導方法をまとめた計画を「落合小・個別の学習カリキュラム」として作成し、児童一人一人の個に応じた学力向上、個々の個性の伸長、習熟に応じたきめ細やかな指導を行っています。

このような取組を可能にしているのは、小規模校ならではの良さであり、大きな魅力であると思います。また、児童同士の望ましい人間関係や児童と教師の信頼関係を築く際にも、本校の強みを生かすことを意識して教育活動の充実に努めています。

二 保護者・地域との連携

本校では、例年多くの学校行事・活動を保護者・地域住民の方々の参加・協力の下に行っています。



【田植えの様子】

これらを含む全ての活動において、全校児童が縦割の班を構成し、上級生が下級生のお世話をしながら活動する形態をとっています。相互の成長を図っています。

三 閉校・統合に向けて

明治九年の開校より、百四十五年の歴史を持つ本校は、令和六年度末に閉校し、翌年度の令和七年度より添田町内の他の四小学校と統合することが決定しています。自分たちの地域・学校が大好きな素直で純朴な児童たちは、温かな地域の方々との関わりを通して様々なことを学んでいます。

小規模校のよさを生かした学校づくり

～地域資源を活用した特色ある取組を通して～

岡垣町立内浦小学校長 宮原仁美

本校は、全校児童六十六名の小規模校で特認校制度を用いています。目指す児童像は「じぶんがすき・みんながすき・うつらがすき」です。本校は、コミュニティ・スクールです。地域や保護者と協力し、地域と共にある学校を目指し、小規模校のよさを生かした特色ある教育活動を行っています。

一 地域資源を生かした体験活動

① 内浦オリエンテーリング

四月に、一年生を迎える会・縦割班発足式と合わせ、内浦オリエンテーリングを実施します。縦割チームで交流しながら校区内の豊かな

自然（海・山・畑等）を満喫しながら教職員が出すミッショニングをクリアしたり、ポイントを探したりします。すべて、教職員の手作りで、地域の方や保護者の方も児童の見守りなどで参加します。

③ 地域人材活用

地域の方を講師として招き、「消防団による避難訓練」「農業体験」「五年生宿泊体験学習」（湯川山登山、海岸線のサイクリング・星座観察等）を行っています。宿泊体験は、地元の施設を活用し、地域や保護者の協力のもと実施しています。地域の素晴らしい資源や人材を惜しみなく活用しています。実際に「見る・聞く・触る」を大切にしています。

二 学力向上・体力向上の取組

び、体験することによって多くの達成感を味わっています。今後は、今までの学びを自信へと繋げ統合校へ、また中学校へと送り出したいと、日々考えています。



【サーフィン体験授業（6年生の様子）】

小規模校のよさを生かし、一人一人に応じたきめ細やかな指導を行っています。例えば、習熟度別の算数の授業を実施し、基礎・基本の定着を図っています。朝の帯時間の学力アップタイム、昼休みの補充学習月に一度の体育館での「寺子屋」(四～六年生対象で、目標を決め計算問題にチャレンジ)や「音読交流会」(一～三年対象で、学級ごとに国語の教材を音読発表)を実施しています。また、昼休みの終わり五分を「内浦タイム」とし、ランニングや竹馬など季節に応じた体力づくりを行っています。いずれも、児童会や委員会活動と連動し、児童の企画・参画力の育成に努めています。

取組の結果、全国学力・学習状況調査や体力テストで全国平均を大きく超え、ほとんどの保護者から「信頼できる学校」との評価をいただいている。今後も、地域資源を積極的に活用した特色のある体験活動を計画し、一人一人のよさを大切にした教育を推進します。

地域とともににある学校をめざして

築上町立小原小学校長 和才陽子

本校は、福岡県東部に位置し、町内を流れる真如寺川の中流域、東九州自動車道の椎田ICから二キロメートル山側に入った国見山の麓にあります。豊かな自然に恵まれた地域で、全校児童九名の準へき地・小規模校です。

また、コミュニティ・スクール(C・S)が始まっています。学校と校区住民と

のつながりは深く、学校行事等にも非常に協力的で支援を惜しみません。

本校の教育目標は、「ふるさとに誇りをもち、確かな学力を身につけ、心豊かでたくましい子どもの育成」です。この目標の実現のために、C・S委員をはじめ地域や保護者、教職員が一丸となつて様々な活動を通して児童を育っています。

まず、「小原神楽」です。築上町は、菅原道真公ゆかりの綱敷天満宮や中世宇都宮氏の史跡等の名所旧跡があり、小原岩陰遺跡等の文化的な遺産を有しています。国の重要無形民俗文化財に指定されている「豊前神楽」の一つである「小原神楽」の継承の一端を児童は担っています。

本校では、地域の人や友だとの関わりを深めていくとともに、ふるさとを見直し、愛着を深めていくことができるよう、総合的な学習の時間に「伝えよう小原の伝統文化」という学習を行っています。神楽講の一員として所属している児童もおり、全校の児童を対象に、年間十回小原神楽講から地域住民でもある講師を招いて指導をしていただいている。

次に、「米づくり体験」です。「農山村であるこの校区を誇りに思う子どもに育てたい。」という地域の声から始まつた「稲作体験ものがあり」。この取組は今年度で五年目になります。C・S委員の協力を得ながら、田植え、稲刈り、餅つきを地域の方々や保護者と共に行い、勤労の大切さや地域の自然を知り、自然の恵みのありがたさなどを感じる体験となっています。

また、本校でとりわけ特徴的なものは、「小

原小学校・小原校区秋季大運動会」「小原ふれ合い文化フェスタ」です。この二大行事は、児童・保護者だけでなく、地域住民の方が大勢参加し、地域あげの行事となっています。

このように、学校だけでなく地域との関係を大切にした体験活動を通して、児童は地域のよさを知り、ふるさとを誇りに思う心が育つてきています。

残念ながら新型コロナウイルス感染症防止対策で昨年同様、今年度も地域行事の中止や規模縮小での交流しかできていません。しかし、機会のあるごとに地域の方々のご協力をいただいています。今後も引き続き学校・地域の行事を通して、小原の自然や地域の方々・保護者とのつながりを生かした「地域とともにある学校づくり」を推進していきたいと思っています。



【小原小学校 校舎】

各 部 の 活 動 報 告

対策部活動状況の報告

対策部長 出 口 博 雄

今年度の対策部の活動は、福岡県教育委員会への要望書の取りまとめ及び市町村教育委員会要望内容についての実態把握、全連小三地区対策担当者連絡協議会への参加と、三部幹事会における情報交換が主な内容です。例年行っています被災地等の研修視察につきましては、本年度は夏季休業期間中の実施を延期としており、今後実施の可否も含めて検討の予定です。

一 本年度の要望書の重点項目

- ① 小学校・中学校の合同会議において内容を検討し、次の七点の要望を行いました。
 - ① 学級編成及び教職員定数の改正
 - ・加配定数を基礎定数に振り替えることなく教職員定数を拡充させること
 - ② 学級編成及び教職員定数の改正
 - ・中学校における三十五人以下学級実現の国への働きかけ、及び特別支援学級の標準定数六人への見直し
 - ③ 教職員の人事の適正化
 - ・小学校における授業の持ち時間数削減による業務改善に向けた専科教員の採用
 - ・指導方法工夫改善教員のさらなる増員
 - ・ALTや教育の情報化推進に向けた専門職員の配置
 - ④ 教職員の人事の適正化

- ⑤ 特別支援教育に係る人的・物的環境整備
- ⑥ 教職員の人事の適正化
- ⑦ 学校運営実態に沿った再任用教員の勤務体制の構築

- ⑥ 安全・安心かつ活力ある学校づくり
- ⑦ 児童生徒の教育の機会均等を保障するためのICT環境整備

- ⑥ 安全・安心かつ活力ある学校づくり
- ⑦ 児童生徒の教育の機会均等を保障するためのICT環境整備
- ⑦ 部活動の適正化
 - ・「運動部活動の在り方にに関する方針」に沿つた環境改善

調査研究部アンケート

本年度は昨年度のアンケートを次のように修正しました。

- 「新学習指導要領全面実施に係る現状と課題について」という項目を、「教育活動にかかる現状と課題について」に変更
 - 新しい内容として、「教職員の不祥事防止の取組」と「働き方改革」を追加
- その上で、次の二つの内容について県内七十六校から回答をいただきました。
- ① 新学習指導要領全面実施に係る現状と課題
 - ② 教員の資質向上に向けた取組と学力調査その結果と分析について少し触れます。
 - ③ 多数の学校が時数確保に努めており、そのうち二十五%は一日七時間授業を実施している

- ① 小中連絡会（重点項目内容選定）
 - 五月二十一日、六月十日
- ② 県教委への要望書提出
 - 七月十九日
- ③ 県教委 小中学校校長会要望書に係る説明会
 - 九月二日（延期）
- ④ 全連小三地区対策担当者連絡協議会
 - 十月二十七日
- ⑤ 市町村教育委員会要望内容についての実態把握・集約
 - 十二月末まで
- ⑥ 対策部長会
 - 一月二十六日

調査研究部活動状況の報告

調査研究部長 西 村 真 輝

調査研究部は、県小学校長会の活動方針に基づき、研究主題「豊かな未来を創り出す子どもを育てる小学校教育を推進する学校経営」に関する調査及び研究を行っています。

- 「新学習指導要領全面実施に係る現状と課題について」という項目を、「教育活動にかかる現状と課題について」に変更
- 新しい内容として、「教職員の不祥事防止の取組」と「働き方改革」を追加
- その上で、次の二つの内容について県内七十六校から回答をいただきました。
- ① 新学習指導要領全面実施に係る現状と課題
 - ② 教員の資質向上に向けた取組と学力調査その結果と分析について少し触れます。
 - ③ 多数の学校が時数確保に努めており、そのうち二十五%は一日七時間授業を実施している
- 授業改善は盛んに行われている。主に研究授業の実施や管理職の授業参観などによって推進されている
- ・ICT環境整備は九十九%の学校で進捗が見られ、一人一台のタブレット配付も

八十三%の学校で完了している。ただし、自宅への持ち帰りは三十二%に留まっている。

・働き方改革の取組としてペーパーレス会議

や校内システム掲示板の活用等が増えている。また、教師の授業力向上につき

という声もある。

詳しくは報告書にまとめており、詳しくは報告書にまとめておりますので、ぜひ

ひご一読ください。

二 三地区調査担当者連絡協議会

・日 時 令和3年10月27日

・場 所 福岡リーセントホテル

・参加者 中国、四国、九州地区の十七県の調

査研究部長（うち一名欠席、五名オンライン参加）

・内 容 ①新学習指導要領の取組状況と課題

②教員の資質向上に向けた取組と学力調査を生かした学力向上策

一 これまでの具体的な活動

(1) 県小学校長会及び各郡市校長会における

広報活動の活性化に資する広報部長研修会

※今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止

のため第一回、第二回ともに未開催

(2) 学校経営の充実に資する県小学校長会報

誌「校長会報」九十七号を七月に発行

内容「会長挨拶」（渡邊正則会長）

「退任副会長挨拶」（六地区）

「新任校長抱負」（六地区）

(3) 県小学校長会ホームページの管理及び運用

更新内容

開会行事では、全国連合小学校長会の大字
弘一郎会長から「全国学力・学習状況調査の
結果」「令和四年度の概算要求」「教員免許更新
制」等についてお話をがありました。教育の動向
や校長会の対応などについて理解を深めること
ができました。続いて各県の代表調査部長によ
る協議が行われました。今回のキーワードとな
ったのは「格差」です。タブレット活用一つと
つても、家庭環境の違いが活用状況の差を生ん
でおり、それが学力格差につながらないように
配慮が欠かせません。また西日本十七県だけで
も地域格差は大きく、どこの小学校でも同レベ
ルの教育を提供する難しさを感じると共に、校

長会が担う役割と責任の大きさを再認識しました。

広報部活動状況の報告

広報部長 西田剛信

〔第七十三回九州地区小学校長協議会研究大
会福岡大会の御案内・大会要録の掲載〕
〔研究紀要執筆依頼・原稿フォーマット等を
新着情報として掲載〕

○小学校時報
(4) 全連小機関誌への本県からの寄稿

〔六月号〕会員の声「特別支援教育の充実を
図る学校経営」

〔八月号〕会員の声「危機管理の強化を図る
学校運営」

添田町立添田小学校長 益田茂先生

〔九月号〕巻頭言「そこにある“意味”と思ふ」

全国連合小学校長会 常任理事 県会長

小郡市立のぞみが丘小学校長 渡邊正則先生

〔十一月号〕各地区校長会の動き（九州地区）

県幹事長 糸島市立可也小学校長

〔十一月号〕九州地区福岡大会の概況

糸島市立怡土小学校長 廣渡一郎先生

〔十二月号〕会員の声「GIGAスクールの実現」

田川市立伊田小学校長 田中裕子先生

木下伸生先生

二 今後の予定

(1) 「校長会報」九十八号を十二月に発行

内容「福岡県教育の動向」（義務教育課長）

「特色ある学校経営」（六地区）

「各部活動状況の報告」

〔第三回広報部長会 一月二十六日（水）〕

令和3年度研究紀要発行 二月下旬

〔令和3年度版に更新〕